

**独立行政法人国立国語研究所「外来語」委員会 第5回
議事要旨**

1. 日時 平成15年2月18日(火) 14:00~16:00
2. 場所 国立国語研究所会議室
3. 出席者 全委員出席
4. 会議の概要

(1) 第1回最終発表に向けての作業について

- イ. 前回委員会の審議により昨年12月末に第1回中間発表を行ってから、発表語を含む外来語の定着度世論調査を行なった。世論調査の結果については、全体と60才以上の二つに分け、それぞれ25%刻みにして定着の傾向を分かりやすく記号化して最終発表に登載することとした。
- ロ. 中間発表に際しては、最終発表に向けて広く一般に対しても言い換え提案を要請した。全体的な見解、個々の言い換え案など傾聴すべき貴重な意見が多数寄せられたため、種々の角度から分析と集約を行ない最終発表に盛り込むこととした。
- ハ. 最終発表が受け入れやすい提案になるよう各分野の専門家や当事者への聞き取り調査を行なって、用語意識を適切に反映させるよう努めることとした。
- ニ. 批判的意見が多かった言い換え語、重要概念を含む問題語については再度、各委員の詳細意見に基づいて検討を重ねることとした。
- ホ. 最終発表における各対象語の提示情報は、項目を絞り込んだ方向性の明確なものにすることとした。

(2) 第2回中間発表に向けての作業について

- イ. 検討対象語の選定については世論調査結果に基づいて行ない、言い換え候補語は当初より一般から募集し委員の作業に生かす、候補語の絞込みは委員による二段階の投票を基本とすることとした。
- ロ. 第2回以降の検討対象語については、最新白書19種から問題となりそうなものとして取り上げたもの計270語を世論調査にかけ、そこから定着度の高くない結果が得られかつ第1回で言い換えた語を除いたものをほぼ3分割し、順次第2回、第3回、第4回分として検討対象にすることとした。

(3) 会議での主な意見

言葉は場合に応じていろいろな文脈の中で意味をもつが、また別に基本的な意味があり、その基本的意味のほうを言い換えるという立場で考え、場合、場合のものは発言者の内容に任せる姿勢で言葉に接していかないとむずかしいのではないか。

和製英語の場合は、実際の英語には存在しない言葉を英語と信じて使っていることが多いのが問題。つまり英語で言っているときの実際の意味と、カタカナ語になったときと意味が大幅にずれることが問題であり、なぜこれをカタカナ語にして使うと問題なのかという点を盛り込む必要がある。

最終発表としてそれが指針になるためには、これからの日本語をどうやって動かしていくのか、今何がまずいのか分かり、活性化するための手だてとして提案

するという方向性がなければいけない。

用例と言い換え語例は一緒にしてはつきりさせる。意味と説明例の重複があるので一つにまとめられるのではないか。

見たり、聞いたりしているという認知度は高いけれども理解率が低い社会語とでも呼べる言葉、一方、新聞とかテレビなどには出てこないが、日常生活には使いよく知っているという生活語とでも呼べる言葉がある。社会語はもっと説明をつけなければいけないが、生活語はもう定着させてしまってもいいという判断もできる。

60才以上の理解度の平均が低いというのは注目すべき点で、60才以上の人々に対して配慮するという事は押さえておく必要がある。

言い換え語を作るに当たっては、意味の正確な把握が大事であり、何が中核語であるかということ判断していくことが大切で、言い換え語を多くしてあらゆる言葉で対応するという事はまず無理であろう。

定着しているかどうかということより、それを使うことのどこがどうして問題があるというのを明らかにしていくほうが良いのではないか。

第1回中間発表の言い換えについて、なじみの薄い漢語を使ったものもあるが、無理が多少あったのかなという反省は今ある。

専門家、当事者への聞き取り調査等に関しては、丁寧なプロセスをきちんとして意見を交換する必要があると思われる。

一つの言葉で言い換えるのはかなり乱暴だという意見もかなりあるが、あまり言い換え例をたくさん作ると、言い換えが拡散する恐れがあり、結局それならば外来語のままが良いということにもなりかねない。ここはひとつ色々な意見はあるが思い切って一つでやってみても良いのではないか。

以 上